

親の愛を求め

増え続ける児童虐待

▷5

「育児ができない人への偏見が、さらにその人を追いつめる。虐待を防ぐためにも、悩みを抱える人がいれば相談相手になってほしい」徳島大学病院(徳島市蔵本町)が開設している「子ども親のこころ診療室」でカウソウセリヤを担当する宮恒夫同大医学部保健心理学教授(55)は、その呼び掛ける「同診療室には、子育てに悩む保護者の相談が後を絶たない。

診療室は2003年10月に開設。親による児童虐待以外に、不登校を引きこもり、心身症の子どもを抱える保護者らが1カ月に約100人訪れる。二宮さんによると、子どもを虐待している親は向を向って向き合えないが、どうしてならぬのか悩んでいることが多いという。

「子ども親のこころ診療室」では、本誌「子どもを立派に育てたい」2生懸命だ。その人が、養育者としての心を少しずつ形を築いていこうと

相談相手



「育児ができない人に偏見を持たないでほしい」と話す二宮恒夫客員教授—徳島大学病院

偏見持たず寄り添って

に、寄り添うことが大切」一方、虐待を受けた子どもも、その影響は大きい。昨年、虐待を受けた子どもは全国で6万人近くいるが、さまざまな心理的後遺症や過激な行動を引き起こしている。「虐待を受けた子どもには、安心して暮らせる場所がなく、かわいがる多動タイプは非行に走る可能性が高い」と、成長してもいままに言う。風潮期になると、過去の記憶が思い通りにならない

「育児ができない人への偏見を持たないでほしい」と話す二宮恒夫客員教授(55)は、その呼び掛ける「同診療室には、子育てに悩む保護者の相談が後を絶たない。

診療室は2003年10月に開設。親による児童虐待以外に、不登校を引きこもり、心身症の子どもを抱える保護者らが1カ月に約100人訪れる。二宮さんによると、子どもを虐待している親は向を向って向き合えないが、どうしてならぬのか悩んでいることが多いという。

「殴られるんじゃないか」など、人間不信になる。不登校になる子どもの中には、元をたどれば虐待が原因になっている子どももいる。

虐待を受けた、幼少期には「反抗性愛着障害」という症状が出る。警戒心が強くて孤立する「自閉症タイプ」も、かわいがられようとして大人にすり寄る「多動タイプ」がある。それが、学童期に入ると「反抗挑戦性障害」になり、自閉症タイプの子は多動タイプの子は非行に走る可能性が高い。

二宮さんは「わが子には虐待しないように努力するが、育児が思い通りにならないと、自分が過去に受けたことを無意識にやっつけてしまう。虐待を連鎖させないためにも、虐待の早期発見が必要」と話

「連鎖」防止へ早期発見必要

と、自分が過去に受けたことを無意識にやっつけてしまう。虐待を連鎖させないためにも、虐待の早期発見が必要」と話す。

二宮さんによると、虐待をする親だけが悪いという考え方に反論する。虐待が連鎖しているなら、虐待している人の親の子育てが間違っていたことになるからだ。また、問題のある家庭に対する偏見が、困っている人をより孤立させていることも指摘する。

「親は頑張っているのに、表面的な行動で子育てに不真面目だと差別しないでほしい。相談を受けた側が、その人のことを『悪い人』『変わった人』という偏見を持っていて、その人は育児に困っても相談しようと思わなくなる」と。

その上で、二宮さんは、少数の専門家だけでは十分に対応できず、誰もが、育児に悩んでいる人が相談できる隣人になってほしいと訴える。「相談はいつでも」「こころ診療室」と「こころ診療室」を開設する。かえって育児が自信を失う。相手の気持ちに寄りかかると共感してあげてほしい」と話した。(棚上泰雅)

「かわい